

中学校の部

* 作品は原文のまま掲載しています。

宮城県知事賞

自転車走行のマナーと事故について

岩沼市立岩沼西中学校 二年 太田 万葉

夏休み直前に地域の方から、自転車通学の西中生の交通マナーが目に見えるという趣旨の手紙が届いた。
私も自転車通学をしているので自分事ととらえ、自転車走行のマナーと事故について考えてみることにした。

手紙の内容は、歩道を走っている、スピードを出している、一旦停止するべきところを止まらずに通行する。中でも一番迷惑だと思われるであろう行為は、大勢で連なっているが物顔で走行することであろうか。

下校の時間帯は重なるし、仲間意識もあり、楽しく話しながら下校したいところだが、端から見れば危険だし迷惑だということだろう。

なぜ中学生と地域を含む一般の方との交通マナーに意識の差があるのか、調べてみることにした。

まず驚いたのが、自転車事故の割合が多いのは圧倒的に中高生だというデータを見た時だ。

体力の落ちた高齢者が多いものだとばかり思い込んでいた。

事故の要因の多くはやはり法令違反が占め、中でも「時不停止」と「安全不確認」の割合が高くなっていた。

NPO法人自転車政策・計画推進機構理事長の古倉宗治氏によると、中高生の自転車事故が多い理由を、こう述べている。

① 自転車利用や交通に関する経験が浅く、交通事故の危険性に対する認識が低い。
② ルールマナーに関する教育を受けているものの、自転車という「車両」を運転しているという意識や責任感が乏しい。

③ 客観的なデータ(事故の発生場所、相手方、事故態様、事故要因など)に基づき重点的かつ具体的な説明が手薄である。

①と②については、私自身思い当たる節がいくつかある。

経験が浅いことは十分承知しているはずなのに、一年以上自転車通学をしている慣れや、無意味な優越感、スピードを出す楽しさなどを感じている。中学生だから許されると、どこかに甘えが生じていたかもしれない。

自転車といえば身近で親しみを感ずるけれど、車両を運転しているという意識を持てば、自ずと気も引き締まる。無謀な運転をすれば、自分だけでなく他者も危険にさらす恐れがあるという意識が高まるだろう。

③は学校や公的機関にお願いしたい。個人が特定されない方法で事故の客観的データを公開してほしい。半年や一年ごとで良いと思う。通学路のどこで事故が起りやすいのかを知り、考えるきっかけにもしたい。

匿名ではあったが、意を決して手紙を下された方に伝えたい。私たちも地域の一員である。皆が安全かつ快適に過ごせるようにしていかなければならないと、強く思う。

宮城県警察本部長賞

事故のない世の中を目指して

石巻市立石巻中学校 二年 鈴木 真綾

私が交通安全について特に改善しなければいけないと思うことが二つあります。

一つ目は、通学路の交通安全についてです。毎日の登下校で、私が信号の無い横断歩道を渡ろうと待っているのに私のことを知らんぷりして通り過ぎていく車が多いので、なかなか渡れず困るときがあります。また、道幅が狭い通学路なのにもかかわらずスピードを出す車があります。このことから、私は事故に遭わないために登下校の際、横断歩道を渡るときは車が止まっていることをしっかりと見て確認してから渡ったり、友達と歩く場合は横に広がって歩かないようにしたりしています。車を運転する人も歩行者の存在に気づけるように周りを良く見て運転をして、事故が起きないようにしてほしいです。

二つ目は、高齢者の事故についてです。高齢者は一定の年齢になったら運転免許を返納するべきだと思います。学校の授業で高齢者の免許返納について話し合ったときに、私は返納した方がいいという意見でしたが、クラスの3分の2ほどが反対の意見でした。私はその結果に驚きました。実際に事故が多発しているのになぜ反対なのだろうと思いました。反対の人は「交通手段がなくなる」今は正常に運転ができていたから大丈夫などの意見でした。けれども、ニュースで高齢者の事故がたびたび報道されていたり、私も実際に母が運転する車に乗っていたときに危なっかしい運転をする高齢者を見たことがあります。今は正常に運転が出来ていても、高齢者は急に体調が悪くなったりアクセルとブレーキの踏み間違いをしてしまう危険性があるので、免許を返納した方がいいと思います。しかし、免許を返納することで外出したいときに交通手段がなくなるという問題が出てくるので、食料などの配達や、タクシーやバスの乗り放題など、免許を返納しても不自由のない生活が出来るようにしていく必要があると思います。

私はあと四年後には運転免許を取得することが出来ます。そのときに自己中心的な運転をするのではなく、心に余裕を持ち、周りに配慮が出来る運転をしていきたいです。また、車を持たなくても不自由なく暮らしていけるような仕組みが出来てほしいです。事故は自分自身が思っているよりも身近に起り得るものです。痛い思いや、悲しい思いをする人が一人でも少なくなるように事故のない世の中を目指した一人一人の行動が、これからの未来をより良いものにすることが出来るのです。

* 作品は原文のまま掲載しています。

宮城県教育委員会教育長賞

自転車事故から思ったこと

岩沼市立岩沼中学校 三年 齊藤 茉莉

一年くらい前のことです。私が部活を終えて通学路を歩いていると、自宅の近くの曲がり角におばさんが自転車ごと倒れていました。初めに目撃していた人がそばにいたので私は勇気を出して、どうかしたんですか。私の家はすぐ近くですが、何か手伝うことはありますか。」と聞きました。そうしたら、おばさんを選んで来てもらえないかな。」と言われたので、私は急いで母を呼びに行きました。転倒していたおばさんは、意識はあったのですが、痛みで起きあがることが出来ず、頭からも血がにじんでいました。母と目撃した人とで救急車を呼んだり、おばさんの家族に電話をかけたりました。

そのとき私が感じたことは、とても怖かったことです。そして、おばさんは大丈夫かなと心配でなりません。後からおばさんとその家族がわざわざお礼に来てくださったのですが、話をうかがうと、腕は骨折していて手術をしたそうです。慣れているはずの道路での自転車の転倒で、おばさん自身もとてもびっくりしたのだそうです。

私がこの事故を通して思ったことは、二つあります。

一つ目は、使い慣れている道でも気を抜かないでしっかりと運転しなければならぬことです。大丈夫であろうと思っても大丈夫ではないときもあるかもしれません。常に気を引き締めて、自転車に乗ろうと思えました。

二つ目は、ヘルメットの着用です。おばさんは、ヘルメットではなく、普通の帽子を着用していました。もし、帽子ではなく、ヘルメットだったら、頭をけがしなかったかもしれません。

数ヶ月後に私は、偶然おばさんを見かけました。おばさんは、自分の体に合ったサイズの自転車に乗っていて、ヘルメットも着用していました。さらに、曲がり角では、自転車から降りて慎重に曲がっていました。おばさんが慎重なぐらい安全運転になっていたのです。私は、安心しました。私も見習いたいなと思いました。

自転車は、手軽に乗れるし、少し遠くにも行けるので便利です。でも、少しの油断や、バランスを崩したりすれば、事故も隣り合わせであることをわすれてはなりません。そのことを忘れずに、安全運転を心がけていきたいです。そして、年に一度は、自転車屋さんで点検してもらったり、自分の身長にサドルを合わせたりすることも大事だと思っています。

この事故を通して安全な自転車の利用について色々な事を考えたので、考えたことを忘れないで自転車に乗ろうと思います。

一般社団法人宮城県交通安全協会会長賞

事故を減らすために

仙台市立第一中学校 一年 村上 奏絵

魔の七歳」という言葉を聞いたことがありますか。なぜこの言葉ができたのでしょうか。交通事故総合分析センターが二〇一六年に発表した交通事故分析レポートNo.一二六によると、二〇一五年の交通事故死者数の中で最も多い年齢層は五才から九才で四八五三人になり、その中でも七才が一四〇〇人で特に多くなっています。これが魔の七歳と呼ばれている理由です。

では、七才ほどの子供の事故を少しでも減らすにはどうすればいいのでしょうか。

二〇一四〜二〇一八年の小学生歩行中の通行目的別の死者・重傷者数(警察庁調べ)によると、下校中が二一・八%、遊んでいるときに二〇・五%が多かったです。原因は飛び出しが三八・九%で最も多く、横断違反が一七・六%と続いています。七才になると小学校に入学して友達だけで登下校をしたり、遊んだりして大人が見ていないところでの事故のリスクが高まると私は考えました。

そこで私はこのような事を少しでも減らすために私達ができることを二つ考えました。

一つ目は、声かけです。私は中学校に行く道に小学校があります。そこまでに行く道にはたくさん小学生が歩いています。この道は細い道や車通りの多い道、信号がない横断歩道など危ないところが多く、車とぶつかりそうになっていたり、横断歩道が無いところをわたっている小学生をたまに見ます。その現場を登下校中に近くで見たと見えて見ぬふりをしないで、危ないよ」と一言、声をかけたら、事故につながるリスクを少し減らすことができるのではないかと考えました。

二つ目は、自分達も交通ルールを見直すことです。声かけをしても自分ができるいなければ意味がありません。人のことを注意する前に自分もちゃんと守れているかを見直してお手本としてふさわしい行動をすることで注意されない人も気をつけようと思うようになります。そういう人を見習う人が増えれば地域の交通安全の意識も高くなるのではないのでしょうか。また、話しかけるのが苦手な人もこれなら簡単に協力できます。

私が考えたこの二つのことをしても交通事故はそう簡単になくなりません。しかし、交通事故を減らしたい、交通安全を守ろう、などと考える人が増えれば少しずつ減っていくと思います。いつか事故のない安全な未来になることを願っています。

中学校の部

* 作品は原文のまま掲載しています。

宮城県PTA連合会長賞

危険な「だろぅ運転」

仙台市立第一中学校 一年 石原 優輝

僕は、毎日習い事に行く時に、母の運転する車に乗ります。助手席や後ろの席から見
ていて、最近、自転車に対して危ないなと思うことが多くあります。一時停止をしないで
飛び出して来たり、車から見えないところから横断歩道を渡って来たりしてヒヤッとしま
す。今の危なかったね」と言った時、母は「だろぅ運転をしないように気を付けている」
と言っていました。

「だろぅ運転」と聞いて、どんな運転なのか気になったので調べてみました。「だろぅ運
転」とは、周囲の状況を楽観的に都合良く予測して運転することとあります。そして、だ
ろぅ運転が交通事故の要因として非常に大きな割合を占めている事が分かりました。

「だろぅ運転」の反対の意味で、かもしれない運転」があります。常に高い安全意識を
持ち、危険な状況になる事を予測して運転する事です。

「だろぅ運転」とかもしれない運転」を知って思い出したことがあります。自転車で遊
びに行く途中、狭い十字路を直進しようとした時、左側から車がきていて、ひかれそうに
なつて、右にハンドルを切つて転びました。

僕はちゃんとカーブミラーを見て車は映つていなかったはずでした。だから、車はいない
だろぅと思うてちゃんと減速はしたけど確認をしませんでした。車が来ているかもしれない
と思うて一旦止まって左右の確認をしていれば、このような事は起こらなかったと思いま
した。車側のドライバーの人も、僕と同じように「だろぅ運転」をしていたのだと思いま
す。かもしれない運転」をして、もつとスピードを落ととして、一旦止まって確認をしていれ
ばお互いにびつくりする事ありませんでした。ほんの一瞬の「だろぅ運転」が大きな事
故につながつてしまうと考えると、とてもこわくなりました。車も、自転車でも、皆がお
互いに「かもしれない運転」を心がける事が大切だと思いました。

作文の部 応募作品数

小学校1～3年生の部 8作品

小学校4～6年生の部 49作品

中学校の部 35作品

合 計 92作品